

平成二十四年正月

千葉県旭市の海に面したホテルにて正月迎える

辰の年迎ふ海原初明り

父母へ銀の匙添え雑煮椀

元日に大きな地震

元日の海辺の地震に遭いにけり

ホテルのアトラクション書き初め大会

書初めに安産祈願の四文字あり

大倉山新幹線ガード下辺りにて

獅子舞の笛路地を抜け蒼天へ

一月二十四日〜二十五日、何でも書こう会熱海合宿。

湯温四二度の温泉は結構熱い

新年会節々に染む朝の温泉（ふるろ）

熱海から車で帰り、小田原付近から海越しに丹沢を眺める

神おわすお山聳えたり冬の海

大倉山梅園

梅老いて花早すぎと庭師撫で

犬ふぐり土手に恵みの如く揺れ

蠟梅の和菓子のにき色留め

みつまたの花うつむきて日和かな

藪椿花見るための葉を除ける

それぞれにねずの鞆割る辛夷かな

二月二十九日 関東に雪の後二・二六事件の後を行く

氷川神社

叛乱の記憶の宮や春の雪

憲政会館 旧陸軍省／参謀本部

児らと行き会ふ叛乱の庭長閑なり

神奈川工科大学での講義決定

春燈や講義ノートに手を入れぬ

旭

春燈や娘三人母の部屋

CCレモンホール

矢絣のバスより見えて卒業期

なでしこに袴りりしき卒業期

四月二日、根津 須田とうふ屋

前菜の籠に桜の小枝かな

花見

あおやぎのぬた酸っぱくて花見酒

オリンピックセンター 新入社員研修

花の昼記念写真の声弾け

大倉山雑詠

にわか雨上がり花桐ぬつと立ち

カクテルというバラの這う空家かな

五月十一日 明治神宮 何の花も咲いていない

美しき花嫁に吹く若葉風

老生と見ゆる柏の若葉かな

若葉萌ゆ御紋に楠の代替わり

楠若葉越ゆ赤松の高さかな

倒木に空(す)きたる空や雲の峰

古の泉の音の幽かなり

裸子と櫨の大樹語りをり

代々木公園 プリンセス・ミチコが見事

木漏れ日や紅蓮の如き薔薇開く

五月二十一日朝、金環日食 薄曇り

金環蝕過ぎて臯月に日射しくる

大倉山雑詠

ひなげしの近頃増えし堤かな

故郷の梅実を摘みに来いと言ふ

葉の先に爪より小さき蝸牛

泥濘の更地に残り銭葵

梅雨寒の日、神奈川工科大学へ出勤

梅雨寒やネクタイをてにしてをりぬ

大倉山駅前通り 老舗洋品店が閉店

店仕舞店主敬白夕立風

帰省

肩籠に香りもろとも梅実挽ぐ

完熟の豊後梅挽ぎ掌に豊か

初物の胡瓜の棘の濡れてをり

裾野山荘

七変化まずは稚児の艶姿

切り花の紫陽花卓に溢れをり

大野路や三万尺の夕立雲

七月一七日 梅雨明け

梅を干す生唾の出る風景

ワイン会足許明き帰り道

足許のまだ明るくて蝉の声

追い付きて並びて気付く蝉の声

今年も猛暑

ついこの間は小学生だった隣の娘、東海大文学部一年生

妙齡の隣家の娘暑気払ひ

別の娘は

炎熱や脚にギプスの娘行き

年経たる梅酢を垂らし暑気払ひ

灼け道に現場検証チヨーク跡

積雲の儂く消ゆる劫暑かな

千疋屋の桃を頂く

到来の果肉の赤き桃を剥き

ロンドンオリンピック男子柔道不振

御家芸予選敗退熱帯夜

富士山初冠雪

猛暑日に初冠雪のニュース聞き

八月二十五日、アームストロング逝く。

三十一日は八月二度目の満月、ブルームーン

その一步記せし人逝く青き月

逝く人の印せし一步月青し

ようやく秋めいて

立ち話主の視線に小菊あり

ゑのころの丸き穂揃ひ雲をなす

ゼラニウム葉の黄ばみて9月かな

二学期のランドセル押す法師蟬

初秋

ベランダのゴーヤ収穫

苦瓜の五寸もあれば喰ひたがり

百円を切りし秋刀魚の腹太し

九月二十三日、八街の叔母夫妻を訪ねる

真つ直ぐの道両側は落花生

引き抜きし落花生積む土埃

彼岸も過ぎて

部屋深く入り日の戻る彼岸過ぎ
彼岸過ぐ部屋に入日の戻りきし
彼岸過ぐ戻りし入り日部屋深く

残暑事の他厳しい九月

されどふと感ずる秋の気配

秋澄むやコーヒー豆を購はむ

九月三十日 満月、台風十七号本州直撃

月晴れて夜半の雲の物凄く

日々草の大きな鉢を室内に非難させる

花の鉢抱えて出せり野分あと

十月二日 大倉山バス通り

一陣の風の来し先銀木犀

散歩中

コスモスや薄茶の猫の長く伸び
コスモスやまどろむ猫を起こしけり
コスモスや薄茶の猫の煩がり
コスモスや薄茶の猫と睨み合ひ
コスモスや伏せたる猫の跳び去れり

大倉山雑詠

秋風やアンダーハンドの投手あて

木犀の帰り咲く年得気分

音匂い秋の夜道の楽しかり

黄ばみたるポプラの梢秋の風

平成二十四年十一月一日 小諸懐古園吟行

懐古神社、山本勘助ゆかりの鏡石

陽を透す紅葉を映す鏡石

水彩画を描く一行あり

描く人詠む人をりて紅葉かな

射場、袴姿の男女

大橡の黄葉の光弓を引く

菊の展示会場

掃き寄せし落葉に古城の陽照りぬ

小諸駅、強行遠足に想い。

駅に林檎想ひは遡（のぼ）る半世紀

十一月一日 吟行の夜の余興 袋返し

（後） もう一つ蜜柑を所望昼げ後

（湯） 銭湯の戸間口に咲く小菊かな

（芒） 鷹の羽の芒の鉢を貫いをり

（川） 川面に枯尾花舞うゆうまぐれ

（少） 窓少し開けて秋風通り過ぎ

（峠） 峠道吟行を逃げ紅葉狩り

（蟋蟀） 高階や蟋蟀の鳴く葛籠なく

十一月二日 軽井沢プリンスホテル

降らぬなら降らせて見せようスノーガン

一団の木の实拾いの子等

引率の声は黄色い紅葉山

本館の玄関前、落葉掃き途中

落葉掃き箒の主に電話あり

いけめのドアマン多忙

外套のドアマン朝日背にはいチーズ

高原のホテルを出れば紅葉山

十一月三日、軽井沢から移動、

川上村峠道

紅葉晴れ登坂車線に車寄せ

野辺山高原

高原の新そば幟見過ごせず

十一月二日　　ゆり三回忌　合忌

曾孫増え泣き声高く秋の墓

曾孫増ゆ柿の紅葉の供物皿

真夜中、皆で星を見る

一族の揃ひ真上に寒昂

四日朝冷え込み

法要に集ひし車秋の霜

古ふれば山茶花咲くも芳わられ

十一月二十三日　同期入社の方逝き、四十九日納骨

雨に踏まふ银杏落葉や友送り

瀬谷　徳善寺

食へるとは知らずか榧の実散らばりぬ

榧の実を食ふと拾えば妻笑ひ

松脂に似し香榧の実散らばりて

十一月二十八日　三島にて忘年会

懐かしき顔四つあり暮の駅

(その顔の内の一つ、翌一月二十五日急逝・合掌)

大倉山雑詠

床屋出づ櫟落葉の道暮るる

染付の皿に朝餉の蒸小蕪

十二月六日　代々木公園

この世とも思へず金の落葉かな

一片も散らず名残の紅葉かな

日の透けて紅もほのかに冬の薔薇

衣替え

棚の奥紺のスエタを掘り出しぬ

年の暮　正月は我が家で過ごす

御幣切る爺様の流儀思ひつつ